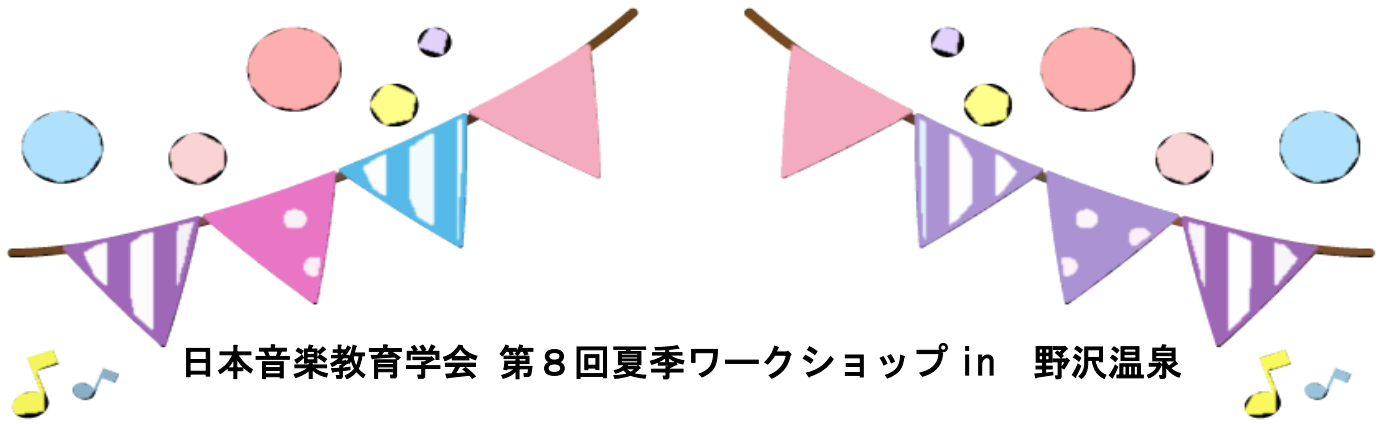




日本音楽教育学会 第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉

地域連携型・新しいワークショップの試み

—音楽の学びの未来をひらく—

報 告 書

会期：2017年8月29日（火）～30日（水）

プレ企画：2017年8月28日（月）

主催：日本音楽教育学会

後援：野沢温泉村教育委員会 長野県音楽教育学会 長野認定こども園協会

◆目次

1. 目次.....	2
2. スケジュール.....	3
3. プレ企画：オペラ公演：《あまんじゃくとうりこひめ》.....	4
4. ワークショップ：アフリカン・リズム.....	6
5. セミナー・ワークショップ：五線譜にかわる選択肢 —「フィギャーノート」を知る—.....	8
6. ラウンドテーブル：養成校における領域「表現」の授業を考える.....	10
7. 懇親会 アイルランド音楽とダンスの夕べ.....	12
8. ワークショップ：掛け合い歌であそぼう.....	13
9. ワークショップ：音声分析勉強会.....	15
10. ラウンドテーブル：学会誌に投稿しよう！その前に….....	17
11. ゼミナールの風景.....	19
12. あとがきにかえて.....	25

◆スケジュール

	午前		昼休み		午後	夜
企画 8月28日 (月)	(非公開 こども園でのプレワーク)				13:15~14:30 子どもたち参加によるオペラ公演 《あまんじゃくとうりこひめ》 (こども園ホール／公開)	ゆったり愚へどうぞ
第1日目 8月29日 (火)	9:55~10:45 ワークショップ アフリカン・リズム (中学校体育館)	10:55~12:00 参加者の振り返りと 意見交換	昼食 弁当	13:00-13:20 「野沢温泉村の一貫教育」 野沢温泉村教育長 岩上 芳宗先生 (公民館)	13:30~15:30 セミナー・ワークショップ 五線譜にかわる選択肢ーフィギュアノートを知るー (公民館)	17:00~19:00 懇親会 (夕食付)
	28日の公演、プレワークの映像視聴（公民館） おぼろ月夜の館の自由見学など				13:30~15:30 ラウンドテーブル 養成校における領域「表現」の授業を考える (公民館)	アイルランド音楽と ダンスのタベ (おぼろ月夜の館)
第2日目 8月30日 (水)	9:40~10:25 ワークショップ 掛け合い歌であそぼう (小学校プレイルーム)	10:35~11:30 参加者の振り返りと 意見交換	昼食 弁当		13:00~15:00 ワークショップ 音声分析勉強会 (公民館)	
	28日の公演、プレワークの映像視聴（公民館） おぼろ月夜の館の自由見学など				13:00~15:00 ラウンドテーブル 学会誌に投稿しよう！その前に・・・ (公民館)	

子どもたち参加によるオペラ公演

《あまんじゃくとうりこひめ》

あまんじゃく	山口梨恵（成蹊小学校）
うりこひめ	市川恵（早稲田大学）
じっさ・殿様	加藤富美子（東京音楽大学）
ばっさ・家来	小佐川心子（立教女学院短期大学）
打楽器	細谷晋（多摩市立東寺方小学校）
打楽器	小井塚ななえ（東洋英和女学院大学）
ピアノ	石川眞佐江（静岡大学）

1. はじめに

のざわこども園年長組の子どもたちと共に、オペラシアターこんにゃく座・大石哲史氏の指導のもと稽古を積んだメンバーが、オペラ《あまんじゃくとうりこひめ》（林光作曲，若林一郎台本，1958年初演，1987年出版）を演じた。本稿では、プレワークから本番に至るまでの経緯と子どもたちの様子について報告する。

2. プレワークの実施

2017年7月27日に、オペラ出演者5名が子ども園にてプレワークを実施した。《うりこひめとあまんじゃく》（作：松谷みよ子／絵：梶山俊夫）の紙芝居を音楽の流れに沿って見せ、軽い演出も交えながら、子どもたちに作品の全体像を披露した。その後、うりこひめチーム、あまんじゃくチーム、じっさ・ばっさ／とのさま・けらいチームの3つのチームに分かれて、子どもたちとストーリーを確認したり、オノマトペを口ずさみながら、役に応じて動いてみたりと、役のイメージを共有した。

うりこひめチームでは、機織りの動作をしながら、「♪ちんからとんとん」という機織りの音を一緒に歌った。子どもたちは、このフレーズが気に入った様子で、後日、日常の保育や家でも楽しみなが

ら口ずさんでいる様子が見られたという。とのさま・けらいチームでは、大名行列をするように歩いてみたり、とのさまとけらいのセリフの真似をしたりとごっこ遊びを楽しんだ。また、あまんじゃくチームは、風や雷の音を打楽器で鳴らしながら、あまんじゃくに扮してホール中を駆け回るなど、体を使って役に入り込んでいった。プレワーク実施後には、園長、クラス担任、オペラ出演者による振り返りの時間を設け、子どもの参加方法と形態の再検討、演出、衣装、小道具や楽器、会場設営など、オペラ上演に向けた話し合いを行った。



写真1 プレワーク時のあまんじゃくチームの様子

3. 本番での子どもたちの様子

プレ企画当日である8月28日（月）は、午前中、オペラ出演者と子どもたちでリハーサル代わりにグループワークと全体の流れの確認を行った。実

際に浴衣などの衣装を身に着けての活動であったためか、意欲をもって取り組んでいる様子が見られた。うりこひめチームの幼児は、機織りの歌遊びと機織りの動きの確認、じっさ・ばっさ・とのさん・けらいチームはうりの踊りの確認ととのさんけらいごっこの台詞の練習、あまんじゃくチームは雷と風の音の楽器遊びとあまんじゃくの機織りの踊りの練習などを中心に各グループで活動した。その後、ホールに集まり、音楽も入れて全体を通して演じ、流れの確認を行った。

本番では、緊張しながらもそれぞれ子どもたちが自分なりのかかわり方で楽しんで公演に参加することができていたように感じられる。また、自分の参加するチームの部分だけでなく友達のチームのところも一緒に歌ったり声を出したりといった姿が見られた。また、出演者としてだけでなく、時には観客として物語の展開や出演者の演技、音楽に集中して鑑賞している様子も見られた。



写真2 うりこひめチーム・本番の様子



写真3・じっさ・ばっさチーム・本番の様子

4. シンポジウム

公演終了後、のざわこども園の木藤純一園長およびきりん組担任・吉越次子保育教諭による、ミニシンポジウムが行われた。のざわこども園の紹介に始まり、今回オペラ公演に参加したきりん組の幼児を3歳児クラスより担任している吉越保育教諭より、「きりん組の表現遊び〜2015年度さくら組から2017年度きりん組までの成長を見つめて〜」と題して発表が行われた。子どもたちの日常の遊びや保育の様子、またこれまでに子どもたちが積み重ねてきた表現遊びや野沢温泉村の地域色豊かな祭りや文化と密接にかかわった遊びの過程とそこでの子どもたちの学びや成長の様子が報告された。

5. おわりに

今回のオペラ公演では、こども園との連携のもと、日常の保育や遊び、地域性や文化とのつながりを意識しながら子どもたちの参加形態を考えていった。声で遊ぶことが歌につながり、イメージをもってモノを探索し音を探ることが楽器を鳴らすことにつながり、言葉や音楽のイメージから動きの表現を見出すというように、オペラに描かれた物語の世界を、遊びを通して子どもたちが楽しむ中で、自然にその世界に入り込むという体験ができたように思う。芸術作品に子どもたちが出会うことは、洗練されてきた音楽文化のひとつに出会うことでもあり、幼児期においても重要な経験であると言える。しかし、その出会いがより子どもたちの中で意味あるものになるためには、日常の遊びや体験、地域文化との自然な形での接点を探っていく必要があり、その結びつきをデザインすることで、より子どもたちにとって深い体験となると考えられる。

(文責：1・2／市川、3・4・5／石川)

アフリカンリズム ワークショップ

ワークショップリーダー：B Bモフラン

企画・進行：たたら康恵（音楽療法 NPO ムジカトゥッティ・明星大学）

協力：野沢温泉村立野沢温泉中学校

1. リズムの発生

冒頭、どのようにサンバのリズムが生まれ、アフリカンドラムからピアノへ移行したかモフランが実演。母国コンゴ民主共和国には 300 もの部族があり、それぞれが独自のリズムやダンスを有する。サランパス族とペンデ族にみられるリズムがジェンベで奏され、それがピアノへ移行するとボサノヴァになり、テンポが速まればサンバになった。楽譜によらない【生きたリズム】が示され、リズム発生の瞬間であった。

2. リズムの対話

続いて、たたらとの2台のジェンベによる【MAME】の演奏。MAME とはママの意味で、忙しく立ち働くママの様子を表現したもの。“トゥンタカタ トゥンタカタ トゥンタカタ タタ”というようにジェンベが応答し合い、急激なブレイクでの音の中断、パワフルなユニゾン部分など、エキサイティングな1曲。

会場の皆さんとのリズムコラボでは、3グループに分かれて、**チバ ナガノ アキハバラ** とリズムを手拍子。アキハバラでは一斉に笑い声が起きる。このように地名をリズム奏することで、記憶に残り共生感が増す。これは長年の日本での体験からモフランが編み出した独自手法。

3. 尺八とのコラボ

全校生徒が尺八に取り組んでいると聞いていたの
で、アフリカンドラムとのコラボを試みた。各学年2
音を演奏、それをたたらのトゥンバ（大型コンガ）の
リズムにのせて、モフランの指揮で即興的に演奏。初
めてのことで生徒たちの戸惑いもあったと予想され
るが、創造性、想像性の拡大を狙った。

4. カリンバ

親指ピアノと呼ばれるカリンバはアフリカの伝
統楽器で、ストーリーテリングに用いられてきた。
その素朴な音、不思議な倍音には治癒効果がある。
ペンタトニックに調弦され、たたらのピアノにの
せ、即興的にモフランが演奏と歌を絡ませた。最後
の部分では、全員のクラップハンドも入り音楽交
流となった。（“KALIMBA” CD 収録曲）

5. マライカ

高校の教科書掲載曲“おいでよマライカ”の歌詞
はスワヒリ語では、“nakupeda malaika”。原語の
ニュアンスを味わってもらえたか？ピアノ、鍵盤
ハーモニカ、歌、カシシで。

6. ゴキブリの歌

日本語とコンゴの言葉リンガラの面白い類似性
の話“友人の名前はブリ、でも彼は魚じゃない”そ
して自作”ゴキブリソング“こうしたユーモアはモ
フランワールドの特性である。

7. アフリカンダンス&ジャンボ

最後は全員立ってアフリカンダンス。“頭、肩、
腰、ディキディキディン”。ジェンベの軽快なリズ
ムにのり、一挙に生徒から笑顔があふれる。数人が
モフランに指名されステージに上がり、共に踊る。
“ジャンボ、ジャンボ ブワナ…”。ジャンボの歌
とダンスが統合され、連携、共感のうちに終幕。

閉塞感、成果主義の対局にある分け隔てのない
アフリカンリズムが、どのように生徒の心に届い
ただろうか。先生方にも新たな可能性の体験とな
ったことを願う。（多田羅康恵）

【ワークショップの振り返り】

コメンテーター 加藤富美子（東京音楽大学）

司会・進行 桐原 礼（信州大学）

野沢温泉中学校の視聴覚室において、約 25 名の参加者と共に、WS について振り返る機会を得た。

まず始めに、多田羅会員、モフラン氏の普段の実践における考えや思いについてご紹介いただいた。多田羅会員は音楽療法士として、他者との関わりに困難を抱えた子どもたちや認知症の高齢者などと触れ合う中で、普段はスムーズに会話ができなくても、音楽ではコミュニケーションをとることができると考えてきた。音楽・教育・福祉が交わっている部分を発展させたいという願いがあり、演奏家とセラピストの素質を持ち合わせたモフラン氏と共に、各地で WS を実践してきているとのことであった。

続いて、モフラン氏のアフリカの音楽や楽器に関する解説と参加者の楽器体験を交えて、アフリカンリズム体験の教育的な意義や、今後の日本の音楽教育に取り入れていきたい視点について共に考える機会を得た。この際、中学生向け WS において、「楽譜を用いない音楽表現」というキーワードが見出されたため、これらに関わる活動例が紹介された。トーキングドラムを取り上げ、参加者同士で「挨拶」や「喧嘩」の場面を即興的に表現したり、ジェンベとトーキングドラムの掛け合いを表現したりした。

コメンテーターの加藤会員からは、「中学生向け WS にて、ジェンベで心臓の鼓動の音を繰り返していくなかにミュート音を加えただけで音楽が生まれ、また、それをピアノに移し替えてサンバにつながっていく場面があった。これまで、『ジェンベのククのリズムパターン』など、ある決まったパターンを伝統的な楽器で奏することをアフリカの音楽として紹介してきたことを大いに反省させられた。どこの国の音楽はこのようなリズムパターン、という捉え方ではなく、リズムが生じる基本原理を組み合わせることで、音

楽が生まれてくるという重要な見方について学ばせていただいた」とのコメントがあった。また野沢温泉中学校音楽専科の倉石教諭からは、「生徒にとって、アフリカの楽器演奏を間近で鑑賞する貴重な体験だったと思う。尺八を実践している学校なので、外国の楽器とのコラボレーションは生徒には良い経験となった。モフランさんの言っていた、『自分たちの中にリズムを持っている、自分の思っていることを表現する』、ということを経後の授業にも取り入れていきたい」とのコメントをいただいた。

WS を体験した中学生の感想文においては、「すごく迫力があってすごく音楽にのって楽しめてよかった」（1年）、「一緒に、尺八や、ダンスみたいなので、コラボできてとても楽しかったです」（1年）、「『心臓の音』がリズムになっていたのもびっくりだし、譜面がないということが、とても印象に残りました」

（2年）、「自分は、こんな感じの楽しい音楽を聞いてみたかったし、やりたかったので、とてもうれしくて、楽しかった。音楽の授業をアフリカンリズムにしてほしい」（2年）、「尺八とコラボしてみて、違うイメージの音楽だけど合わせてみると明るい元気な曲（リズム）になったからすごいと思った」（2年）、「カリンバの音が私が知っている楽器と違っておもしろかった」（3年）、「演奏や話がものすごく興味深かった。僕が経験した音楽ワークショップで、今までで、一番楽しかったし、おもしろかった」（3年）、などと述べられていた。

今回の WS と振り返りを通して、楽譜を用いない中で音楽を感じ取り、その中からまた音楽を生み出していくということは、今後の日本の音楽教育でより重要視していきたい事項であると思われる。また今回のような異文化体験を通して、従来の教材化や指導法などについて振り返り、新たな視点を見出していくことも有意義であると感じられた。

（桐原 礼）

セミナー・ワークショップ： 五線譜に代わる選択肢 「フィギュアノート」を知る

コーディネイター・司会進行：阪井 恵（明星大学）

ワークショップリーダー： 「フィギュアノート普及会 はびみゅーず」メンバー

松田真奈美（代表理事・音楽療法）／片桐典子（竹早保育士養成所）加藤万吏乃（慈恵医大）以上2名は日本音楽療学会認定音楽療法士，青木正人（Pf 調律師）

情報提供： 廣瀬知栄（協力会員 フィギュアノート利用児保護者）

彦坂菜穂子（世田谷区立弦巻小学校） 塚越泉（狛江市立緑野小学校）

フィギュアノート作成アプリ開発：水戸和幸（電気通信大学・ポスター発表による参加）

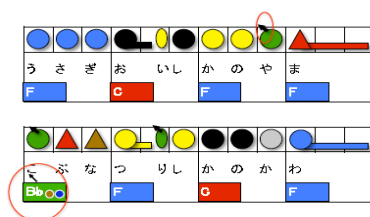
【趣旨】 本セミナー・ワークショップは、全員参加を第一歩とする音楽授業のユニバーサルデザイン（UD）研究の一環として、フィギュアノート（以下FNと略記する）を知ること、どのような人が、なぜFNを必要としているかを知ること、を目的として実施した。以下は、当日のエッセンスである。

【フィギュアノートとは】

FNは色と形による楽譜。フィンランドで障害のある人のケアに従事していたカールロ・ウーシタ氏が1998年頃考案、音楽教育の専門家マルック・カイッコネン氏と共同で音楽療法・音楽教育用に開発し、特許を取得している。日本では2003年、社会福祉法人江差福祉会が教材の著作権、開発権を取得し、（一社）フィギュアノート普及会 HappyMuse が同会の許諾のもと、普及活動を行っている。

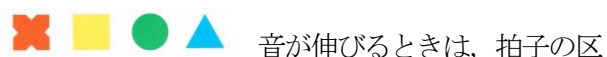
【FNの基本的な読み方・使い方を知ろう】

FN版《ふるさと》（～長調）の冒頭部をご覧ください。仕組みは一目瞭然だろう。赤マル部は



一般向けには解説を要するが、左上向き矢印は、鍵盤楽器の場合は当該の音のフラットに当たる黒鍵を

弾くことを示す。シャープの場合は右上向きの矢印を用いる。左図《ふるさと》で示したのがFNの基本形である。鍵盤上の音名は色で表し、オクターブピッチごとに以下のような異なった形を用いる。



音が伸びるときは、拍子の区

割りにしたがって棒状の腕が右へ伸びる。この方式で、たとえば小学校の教科書掲載曲であれば、充分表すことができる。（→詳しくは**フィギュアノート普及会**はびみゅーずで検索してください。）

普及会は基本形のFN楽譜をもとに、独自のFN版リコーダー譜、五線に載せた形の譜等も作成している。また現行の検定教科書掲載のすべての演奏用五線譜も、FNに変換して揃えてある。電通大の水戸和幸准教授が、五線譜をFNに作成し直すためのアプリを開発している上、普及会では著作権関係もクリア済みである。セミナー・ワークショップ当日は、参加者全員でFNを読み、《八木節》（『音楽のおくりもの6』より）の合奏を試した。

【FNはなぜ、どのような人に必要なのか】

■「発達性ディスレクシア」と呼ばれる障害のある中学1年生男子Aさんの保護者の方を招き、お話を伺った。概略を記す。

Aさんは視力に問題はないが、見え方（視認知）に問題があり、習字で字が崩れる、読み飛ばしをする、

漢字が覚えにくい、などの結果、友人と自分を比べてマイナスの自己イメージに苦しんできた。目と手の協調性もよくないため、五線の読譜やリコーダー演奏は鬼門で、吹きたいのに吹けないジレンマや、皆の前で吹きたくないという気持ちから、荒れたり学校に行かないと言ったりしていた。親としては、きちんと授業を受けているのに吹けない、という醜態をさらすことの強要は、子どもへの心理的虐待に近いかもしれないと胸が痛んだ。そんな時、FN と出会った。普及会のワークショップへの体験参加の感触が良かったため、テストの日に学校へ行かないとしげる A さんに FN で練習をさせてみたところ、どうにか吹けるようになってきて、「これがあれば大丈夫！」ということになった。テストでは、音楽の教科書にはさんだ FN の楽譜を譜面台に立てて吹き、乗り切ることができたと、自信に満ちた笑顔を見せた。

6 年の 3 学期に、音楽専科教諭、校長と協議して A さん本人は FN の使用を許可された。通級利用生をはじめ、他にも同様の困難に直面している児童がいるので、FN を選んで使えるようにしたいと思うが、実態調査の上でなければ難しいとの対応で、実現には至っていない。

■NPO 法人発達サポートネット バオバブの樹の協力により、ディスレクシアのある青年たちへのインタビューをビデオで紹介した。内容の概略を記す。

小学生の頃：鍵盤もリコーダーも好きだけど出来ずにあきらめていた／五線譜を読みながらの演奏は無理「見えている」が「読めない」ということ：バーコードを見ている感じである／自分では、歪んで見えているのかどうか、などはよく分からない

先生の理解と支援：先生は僕ができない理由を理解していなかった／担任は知っていたが音楽の先生には伝わっていなかった／自分には FN という最高の武器があるから教えてあげられると思う

FN を使ってよいと言われたら？：演奏会は暗譜です

る慣例かもしれないが、僕は練習には FN を使う／僕はみんなと違うことで嫌になってしまい、使えないと思う／全員が両方もっていて各自好きな方を選べたら、絶対に使う

みんなの前でのリコーダーテスト：全員の前で一人で吹かなきゃいけない、アレは地獄／テストをなくするのは無理として、準備室で一人だけで聞いてもらいたい

先生がたへの要望：資料集として FN を全員に配布し、選べるようにしてほしい／個人購入ではなく教科書そのものに五線譜と FN を両方載せ、選べるようにしてほしい／FN のリコーダー譜は一番助かったので、小学生の時からあったらよい／音楽は生活の中で必ず聴くもので、小学校時代に音楽を嫌いになりたくなかった／ディスレクシアを知らない人は「努力不足」というが、僕は人の何倍も練習してもできない。証明できない「努力」は評価してもらえないのか？／先生にとっての音楽の終着点はどこなのか？ 弾けるものなら、僕は弾きたい。

【特別支援学級での FN 使用：実践紹介】

粕江市立緑野小・えのき学級で、FN を用いて実践をした彦坂教諭が、児童の自信にあふれた発表ビデオ紹介を含め報告を行った。同実践は「交流及び共同学習」の一環として、えのきの児童が通常級で FN を教えることも実現し、高く評価された。同小・塚越教諭は、児童が自ら練習し、音楽ができる喜びを味わう経過を見てきた立場から、FN 選択が当たりまえに認められることを願う発言を行った。

【総括】

本企画、特に障害当事者の声が、参加者の心に響いたことは、事後アンケートからも確実である。ディスレクシア等、見えにくい障害に関する理解が、これまでは極めて浅かったことも明らかになった。皆様への感謝とともに、今後の FN 普及へのサポートや、授業 UD へのご関心を是非賜りたい。

養成校における領域「表現」の授業を考える

話題提供	吉永早苗（岡山県立大学） 今川恭子（聖心女子大学）
指定討論	宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園） 吉越次子（のざわこども園）
企画・進行	木村充子（桜美林大学） 杉原真晃（聖心女子大学）
企画	小井塚ななえ（東洋英和女学院大学） 長井覚子（白梅学園短期大学） 早川倫子（岡山大学） 村上康子（共立女子大学）

1. これまでの研究の概要と本RTの目的

指針・要領改訂に伴い「育みたい資質・能力」・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された今、我々は、改めて、乳幼児期の経験と学びについて領域「表現」の観点から検討し、それに対応して保育者に求められる資質・能力について問い直すとともに、それらの資質・能力を育成するための養成校の教育について再検討することが必要であると考えている。そこで、養成校での学びが乳幼児期の子どもたちの学びの充実に資するものとなることを願い、養成校の領域「表現」の授業に焦点を当てた研究を進めてきた。まず、養成校の教育の現状と課題を明らかにする手がかりとして、56大学、59学科・専攻等の領域「表現」にかかる科目（133科目）のシラバス分析を行ったⁱ。さらに、領域「表現」に関連する科目についても調査し、科目間の関連や系統性、教員間の連携、当該校における領域「表現」に関連する教育の特徴などについて検討を行ったⁱⁱ。これらの研究を踏まえ、当該科目を担当する教員たちⁱⁱⁱのもつ様々な課題を共有するとともに、保育現場の先生方からは、子どもたちの表現の育ちを支える保育者の専門性とは何か、養成校の教育に何が求められているのか、現場からの率直なご意見をお聞かせいただきたく、本ラウンドテーブルを企画した。

2. 領域「表現」科目の授業実践紹介

吉永早苗会員の担当する当該科目は、①保育の当たり前を問うてみる ②子どもの発達と表現の理解 ③表現を育む環境（感性と表現） ④楽譜って五線じ

ゃなくてもいいの？―身のまわりのモノで音楽を― ⑤声あそびから即席オペレッタへ ⑥模擬保育等を含む内容で構成されており、それぞれの実践について写真・映像とともに紹介された。内容・方法ともに様々な工夫がなされ、また当該科目に多くの時間数が配当されるカリキュラム構成であるため、豊富な授業内容となっている。

今川恭子会員は当該科目において①表現者としての育ち（発達と学習）の理解 ②文化・社会の中に大人が共有する表現のあり方と表現者としての子どもの育ちとの関係を動的に捉える視点の獲得 ③文化的な表現のモデルとしての保育者のあり方の理解の3点を目標としており、前半では領域「表現」の包括的なベースとなる内容を、後半では音から音楽へと導く保育者の役割を意識して扱っている。「新聞紙のワークショップ」の事例が映像とともに紹介され、学生がモノ・人との関わりの中で体験的に表現の育ちについて学ぶ様子が示された。

3. 授業実践紹介に対するコメント：杉原真晃氏

両実践に共通する授業内容として、①「表現」の本質を問い続ける姿勢 ②受動と能動の応答 ③市民教育としての「表現」実践・遊び ④対話としての音・音楽的实践・遊び、愉しむ音楽 ⑤文化の生成の契機としての音・音楽的实践・遊びの5点が挙げられた。また、ここで紹介されたような「表現」の本質を学ぶ授業内容と現場での実践との間に生じ得る「齟齬」についてどう考えるかという問いが提示された。次に、「表現」にかかる実践（遊び）を捉える上で「自

発性・総合性・状況性」が重要であり、「子どもの表現一現場での保育一養成校での学び一養成校での授業」の相互関連の構造が子どもの実践（遊び）を支え成立させていることが示された。

4. グループディスカッション

杉原氏のコメントを受け、「保育者および養成校教員のもつべき専門性とは」を中心に活発な意見交換が行われた。（以下、フロア参加者の意見の抜粋）

◆保育者のもつべき専門性とは

その人自身が音楽的であること／imagination, creativity, 感じるアンテナをもつ／今、目の前にいる子どもを見る目をもつ／子どもの萌芽的な表現を見逃さない／子どもたちの生活やちょっとした言動を大切にそれを継続して遊びに取り入れていく／目の前に広がっている光景、子どもの言動に対してまずは積極的にかかわり、理解しようとする／対話する、引き出す、コミュニケーション能力／保育者自身が楽しむ／なぜだろう？これは何かしら？という好奇心をもつ／学ぼうとする意欲を持ち続ける

◆どのような学生を育てたいか

子どもの素朴な感性に気付く学生／園で育つ（現場に出たあとの「学び方」を知っている）学生／内面の強い学生／単に活動を展開するのではなく、場・人・物などを上手く結びつけ活性化できるような質の高いファシリテート力をもった学生

◆どのような授業を目指したいか

表現の本質を問うような授業内容と現場での実践力とを繋げられる授業／教員同士が連携し、他領域、他科目の学びと領域「表現」の学びをつなげたい

◆養成校教員のもつべき専門性とは

「子ども発」の発想／その人自身が音楽的であること／専門性を持っていることと子どもや保育を理解していることの両方が必要／文化として伝えなければならない知識や技能と、音楽の本質や原点を考え

ることの両方の力が必要

グループディスカッションに続き、のざわこども園園長の木藤純一氏、同教諭の吉越次子氏より、子どもの表現の育ちを支える保育者の専門性と、養成校の教育に求められるものについてお話いただいた。

5. 指定討論：宮里暁美氏

本質を学ぶ養成校の授業内容と保育現場で求められる音楽活動のギャップの問題に対し、「本質的になればなるほど保育現場では驚かれ、ともすると『理論より実践力を』と言われがちだが、養成校の教育に求められるのは『理論に裏付けられた実践力』の育成なのではないか。また、保育実践が繰り返される中で園文化がつくられ実践知が蓄積されていくが、保育現場に求められるのは『学び続け変化し続ける実践』なのではないか」という提言がなされた。

「子どもの日常の中にある『表現』に着目しながら、豊かな表現が生まれる保育とそれを支える環境や援助について考えていきたい」とし、「環境へのまなざし」として①子どもは場を選び、場を作ることから遊びが始まる②子どもは没頭し影響し合う③子どもは変化や美しさ、不思議さを感じる、の3点が、また「表現を支える保育者のかかわり」として①子どもの姿を丹念に捉える②伸びやかな表現へと誘う③感じることの大切さを保護者に伝える、の3点が示された。

（文責：木村充子）

ⁱ 木村充子・相澤千枝子・赤津裕子・東ゆかり・今川恭子・大西頼子・岡澤陽子・斉木美紀子・新開よしみ・杉原真晃・長井寛子・村上康子・山原麻紀子・山本直樹・吉永早苗（2016）「領域『表現』をめぐる養成校の現状と課題—シラバス分析の報告—」第3回保育教諭養成課程研究会研究大会 ポスター発表

ⁱⁱ 木村充子・相澤千枝子・赤津裕子・東ゆかり・今川恭子・大西頼子・岡澤陽子・斉木美紀子・新開よしみ・杉原真晃・長井寛子・村上康子・山原麻紀子・山本直樹・吉永早苗（2017）「領域『表現』をめぐる養成校の現状と課題（2）—科目構成と科目間の関連・連携に着目して—」第4回保育教諭養成課程研究会研究大会 ポスター発表

ⁱⁱⁱ 領域「表現」の授業者の専門領域を調査したところ（脚注 i, 2016）、「音楽」が特出して多いことが明らかになった。

アイルランド音楽とダンスのゆうべ

バウロン

伊原 小百合（東京藝術大学大学院生）

ブズーキ

岡 皆実（東京藝術大学）

フィドル

権藤 英美里（順天堂大学大学院生）

アコーディオン・うた

服部 阿裕未（ベルカント音楽学院）

1. 企画の趣旨

本企画は、アイルランド音楽に親しみながら参加者同士の交流や親睦を深めることを目的とし、東京藝術大学ケルト音楽研究部（通称 g-celt）の出身者4名が屋外にてアイルランド音楽の演奏を行いました。企画はワークショップ2日目の懇親会の一部として、おぼろ月夜の館の外庭にて開催致しました。

2. 企画内容

本企画では、旋律楽器としてフィドル、ボタンアコーディオン、伴奏楽器としてブズーキ、バウロンを用い、ダンスの伴奏音楽を中心に演奏致しました。楽曲は、Reel, Jig, Polka 等、様々なリズムを組み合わせたセットや歌を演奏し、楽器に関する説明や、アイルランド音楽の構造について説明を加えながら進行了しました。楽曲の詳細は以下の通りです。

<セットリスト>

- (1) Titanic Set : “My Heart will Go On”, “The Blarney Pilgrim”, “The Kesh”, “John Ryan’s Polka”
- (2) Jig Set : “Muireann’s Jig”, “Glass of Beer”
- (3) “The Last Rose of Summer” (《庭の千草》)
- (4) ダンス: Clare Lancers (Figure 3) : “The Sally Gardens”, “Maids of Mount Kisco”
- (5) Reel : “Flying Kelly”, “Frank’s Reel”, “The High Reel”

また、後半にはセットダンスのワークショップを行い、大勢の参加者がグループに分かれ、アイルランドのセットダンス「Clare Lancers」を体験しました。

ダンスの手順は以下の通りです。

<Clare Lancers (Figure3)>

- (1) Lead Around
- (2) Swing
- (3) Advanced and Retire
- (4) Wheel
- (5) Swing all
- (6) (2)～(5)の繰り返し
- (7) Swing
- (8) House



【写真1 ダンスの様子】

※時間の都合上、当日(8)は(1)のLead Aroundに差し替え致しました。House とは、Swing をしながら円を一周する動きです。



【写真2 演奏の様子】

野沢温泉村の美しい山々に囲まれ、時折蟬の鳴き声や風の音も交じり、大変心地よい空間の中で演奏させていただきました。またダンスには大勢の方がご参加くださいました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

掛け合い歌であそぼう

with 野沢温泉小学校 1 年の児童のみなさん

授業者：永井民子（小千谷市立片貝小学校）
企 画：伊野義博（新潟大学）
中村正之（新潟大学教育学部附属長岡中学校）
意見交換進行：権藤敦子（広島大学）

掛川由加子（野沢温泉村立野沢温泉小学校）
明道春奈（大淀町立大淀希望ヶ丘小学校）
吉村智宏（長岡市立表町小学校）
協力：野沢温泉村立野沢温泉小学校

1. 趣旨と概要

本ワークショップは、「うたでおはなし～掛け合い歌であそぼう～」という題材を設定し、野沢温泉小学校 1 年生の授業実践を提案しながら、自分の思いを相手に伝え、掛け合う歌のコミュニケーションの意義について検討しようとするものである。また、野沢温泉村の伝統行事で歌われている《道祖神のうた》をはじめ、生活に根ざし伝承されてきた音楽文化の教材性と本実践との関係性について言及し、地域の音楽文化を学校教育のカリキュラムに生かすことの重要性と必要性についても提案している。

2. 授業計画

野沢温泉小学校 1 年生との授業は、次のように計画した。

- 1) 題材名：うたでおはなし～掛け合い歌であそぼう～
- 2) 教材：《うさぎ》《あんたがたどこさ》など
- 3) 目標：
歌で呼びかけたり、応えたりしながら楽しく歌い合う。
相手に歌で呼びかけたり、応えたりする。
相手に伝わるように、歌でインタビューする。
- 4) 指導計画（3 時間：本時 3 / 3）

時	ねらい	学習活動
1	【音楽科】 わらべうたで遊びながら、歌で活動する楽しさや相手に歌いかけるおもしろさを味わう。	・《あんたがたどこさ》で歌い遊ぶ。 ・「呼びかけとこたえ」の仕組みを生かして、掛け合って遊ぶ。 ・《うさぎ》で歌い、遊ぶ。 ・掛け合いの形にして歌い合う。

2	【国語科】 呼びかけられた時のこたえの歌詞を考え、書き出す。	・《うさぎうさぎ》で呼びかけられた時に応えるため、どんな時に跳ねたくなるか考える。 （例：いちごのケーキ、新しいゲーム） ・《あんたがたどこさ》の歌に合うような、野沢温泉の紹介の歌詞をつくる。
3	【音楽科】 《うさぎ》のふしで掛け合いができる。	・《うさぎ》のふしで教師と児童、児童と児童で掛け合いをする。 ・《うさぎ》のふしで、お客様にインタビューをする。

3. 授業の実際

1) 最初の授業

7 月に野沢温泉小学校を訪問し、音楽専科の掛川教諭の協力のもと、永井による 1 時間目の授業を実施した。そこでは、まず、わらべうた《あんたがたどこさ》を取り上げ、歌が掛け合いでできていることを紹介しながら「さ」のところで歌い手を交代しながら遊んだ。次に、《うさぎ》を皆で歌い、掛け合いの構造を生かしてグループや個人で遊び、発表をした。最後に、「《あんたがたどこさ》の歌にのせて、野沢温泉の紹介の歌詞を作ること」と「《うさぎ》の呼びかけ「何見てはねる」に対するこたえを考えてくること」の 2 点の課題を出して終了した。

2) 当日までの野沢温泉小での取り組み

国語科を中心に、《あんたがたどこさ》の歌にのせて、野沢温泉の紹介の歌詞をつくって歌った。また、《うさぎ》の呼びかけに応えられるように、「どんな時にはねたくなるか」歌詞を考え歌う活動を行った。

3) 当日の実践

永井と掛川教諭とのTTによる授業で、《うさぎ》のふしで掛け合いができることをねらいとした。授業は「のざわおんせん だーいすき」で終わる、担任の木村教諭と創作した学級歌を元気に歌って開始。

挨拶の後、まず、《あんたがたどこさ》のふしを使って、前時までに考えてきた歌詞を班ごとに発表する形で、教師の呼びかけに応じて、児童が野沢温泉の紹介を行った。どの班も大勢の参観者の前で、「のざわおんせんには すぱりーながあってさ／そこでみんなが ぷーるにはいってさ／およいでさ あそんでさ おんせんはいってさ／そしてさいごに あいすをたべた」「のざわおんせんには ひまつりがあってさ／そこでおとうが しゃでんをつくってさ／のぼってさ うたってさ たたかってさ／そしてさいごに とうろうほうのうだ」等、紹介することができた。

次に、《うさぎ》による掛け合いに入った。「〇〇何見てはねる」の部分に固有名詞を入れて呼びかけ、それに対して、前時にグループごと考えたこたえをホワイトボードに提示しておき、そこから選択したり、自分で考えたりして応えるという形をとった。児童は積極的に挙手し、歌で応えることを楽しんでいた。

最後に「お客様にインタビューしよう」という課題を設定した。ここでは、個々に参観者のところに行き、名前を聞き、「〇〇せんせ、何見てはねる」と歌いかけ、歌で応えてもらうことをねらった。その際の手順として、「お名前を聞く」「歌でたずねる」「お礼の歌を歌う」という順番にした。「お礼の歌を歌う」場面では、手を叩きながら、ファソの二音音階を用い「教えてくれてありがとさん」と歌うことにした。何度か練習をした後、児童は参観者のところに向かった。実際のところ、一人で周囲の参観者のところに向き歌で会話するには児童の「思い切

り」が必要であったため、グループにするなど取り組みやすい方法にしたほうがよかった、という反省も事後にあがったが、掛川教諭のサポートで、最終的にはすべての児童が歌による掛け合いを体験することができ、授業を終了した。

4. 振り返りと意見交換

授業後の検討会では、まず、授業者からのコメントと趣旨説明を行った。特にここでは、野沢温泉に伝わる《道祖神のうた》と本実践との共通性として、相手に歌いかけ、それに呼応して相手が歌い返す、すなわち、一人では歌えない、仲間がいてはじめて成立する点、その場の状況の中で、気持ちを伝え合い、交流、交感する点、時に即興的に歌詞をつくって歌いかけて、ふしも変わったりする点について伝えた。また、結果的に、地域の音楽文化が保育のあそびにも取り入れられている野沢温泉村ならではの、生活や社会における音楽と子どもたちのつながりを足掛かりにした授展展開の提案が可能になった。

その後、下記の点を中心に意見交換がなされた。

- ・歌詞を旋律にのせる際の音、拍、モーラ処理、授業でめざす児童の姿との関係：自動化・習熟と練習、書記性と口頭性、可視化や記録の必要性
- ・設定された掛け合いでの即興性の捉え方：即興の生まれる場、児童の自発的な音楽性との関係
- ・即興的な掛け合いにおけるピッチの設定と授業における教師の音楽的な支援の関係
- ・児童の主体性の原動力を創り出す教師の言葉かけと本時の授業のヤマ場

フロアからの貴重な指摘を参考に、自分の思いを相手に伝え、掛け合う歌のコミュニケーションを位置づけた実践開発を、引き続き検討していきたい。

最後になりましたが、野沢温泉小学校の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

音声分析勉強会

—Praat による音声の分析方法を学ぶ—

鹿倉 由衣 (東京藝術大学)

志村 洋子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)

市川 恵 (早稲田大学)

1. 本企画の趣旨

我々が歌声などの音声を聴き取り、音声を評価する方法は印象評価も含めてさまざまある。しかし、明らかにしたい事象によっては、聴覚印象を言語化して記述するだけでは不十分なこともある。そこで、音声を可視化することによって、そこから評価の視点がどのように導き出せるかを学ぶ場として企画した。

2. 内容

「声」は、発声器官で生成された空気の波が耳に届いて音として認識されるという多重的で複雑な現象である。声帯振動によって生じた空気振動を可視化することは一般的な手法である。そこでこの音声のスペクトログラムの読み取りに際して、まず音声がいかなる現象によって生起し、どのような特徴がよみとれるのかを整理した。さらに、参加者が各自録音した音声により、Praat を使用して解析する作業を行った。Praat の初期設定から段階的に、実際の作業を確認しながら進め、スペクトログラムを発表や論文に使用するための「表示形式」も提示した。

3. 音声の解析手順についての概略

以下には当日、Praat を使用しながら解説した内容についてその一部分を示した。

今回の勉強会で使用したソフト Praat は音声学における音声分析用のフリーソフトで、アムステルダム大学の Boersma P. と Weenink D. の両名を中心として開発されたものである。

(HP: <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>)

具体的な使用方法についても、Web 上に多数の解説があり、日本語での解説例には下記が分かり易い。参照しながら使用されることをお勧めする。

宇都木昭研究室: Praat 入門

(<https://sites.google.com/site/utsakr/Home/praat/>)

以下は、当日実践した解析の手順の概略である。

①音声の読み込み

音声データはモノラルにしておく (Audacity などの編集ソフトを用いる)

音声データを読み込む: Open Long sound file

分析結果を見る: View

edit view を開いているときに音声を聴く: Tab key で再生、Stop 選択して左下の sel ボタンを押すとそこが拡大される。

※edit view を開いたら、まず: Spectrogram settings ⇒ Window length を 0.1、Dynamic range を 50.0 に設定する。

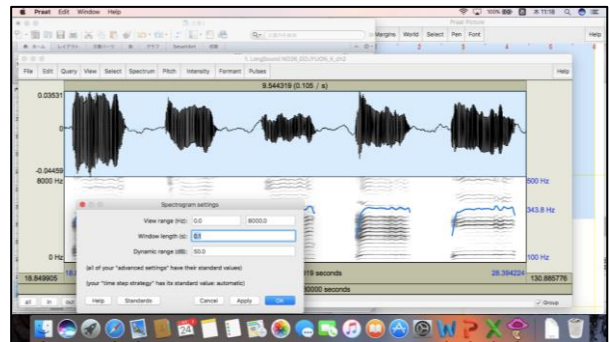


図1 Praat Spectrogram Settings の例

②音声の書き出し

praat picture を出す。書き出す枠の範囲を常に同じ目盛で決めて、この枠を保持しておくこと。枠の範囲の目安は、

音声波形: タテ 0~2.0、ヨコ 0~6

スペクトログラム&ピッチ: 1.0~5、2~6

File から draw visible sound で書きだす。

③スペクトラムの書き出し

分析ウィンドウ **Spectrum** ⇒ Extract visible spectrogram を選択。最初の Praat Object の window に *spectrum untitled* と出る。Picture の枠の範囲を下にずらして、Praat object に出しておいた *spectrum untitled* を選択して Draw (Paint) する。Gamish にチェックが入っている

と枠がつく。すぐに **Margins** を選択して、6 分割くらいの目盛を入れる (Marks left : スペクトルは左、ピッチは右)

④ピッチの書き出し

枠を消さないうちにピッチを上に乗せる。

Extract visible pitch contour を選択。このとき Gamish のチェックをはずしておく (枠を消す)。Object window に *pitch untitled* が出る。これを選択して Draw...その前に **Margins** を選択して目盛を入れる (Marks right : ピッチは右) スペクトラムに重ねないときは、下に大きさをそろえた枠をつくる。

⑤分析結果の保存方法

Save as meta file を選ぶ。これだけでは開けないファイルなので、word にはりつけて保存しておく (挿入するときに「すべての図」ではなく「すべてのファイル」から選ぶ) あるいは、スクリーンショットで保存する。こちらの方が後から言葉や歌詞を入れるのに便利。Mac の場合は、PNG file で保存する。Picture 画面から枠で全体を選択して、保存する。

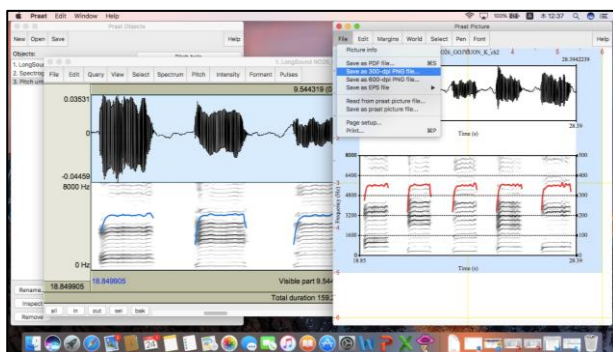


図2 保存の方法 例

4. 当日の様子



【当日の解説の様子】

参加者からは、どのような音声の分析に用いることができるか等の質問や、さまざまな研究への援用の可能性に関して意見が出された。Praat は音声分析ソフトであるが、楽器音の解析にも適用できる。またスペクトルやピッチを確定する際は、ターゲット音以外の背景雑音併せて分析されていないか、複数名で判断する必要があることも確認した。

音声解析を用いた研究を志す場合には、いうまでもなくスペクトルを見る目を養うことが重要であるといえる。以下の図1は、本企画において引用した、一名の話者による「ザ」/ za / と「ダ」/ da / の発声を比較したものである。

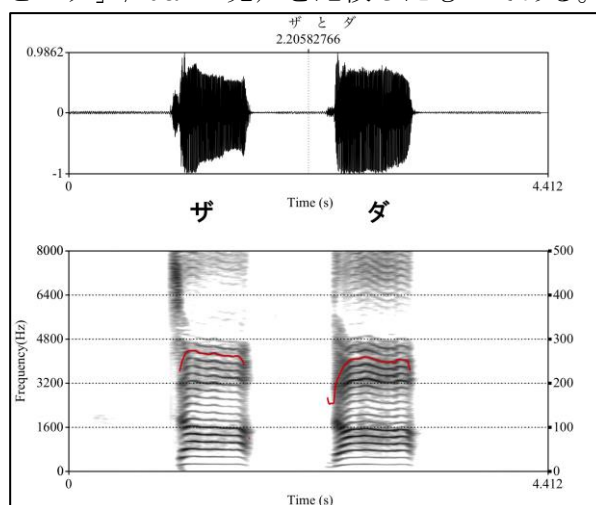


図3 / za / と / da / の発音の比較

縦軸は周波数 (Hz) 横軸は時間 (sec)

聴覚印象においては似通った発音に聴き取れる二音であるが、スペクトルを比較すると、「ザ」の発声に際して、母音の直前に 5000Hz 以上の帯域に / z / の子音が始まっていることがわかる。一方で「ダ」の発声においてはそのような準備は行われていない。

このように、スペクトルによって発音の差異を可視化すると、一般的な母音や子音の特徴ばかりでなく、個人個人の発音の特徴なども分析することが可能となるのである。

参加者には、実践のフィードバックのために当日に使用したパワーポイント資料の PDF を後日メール送信で配布した。

本企画が参加者にとって、スペクトルと聴覚印象のデータから、音声をより多角的に分析する研究への第一歩となればと願っている。

(文責：鹿倉由衣)

学会誌に投稿しよう！ その前に…

情報提供：乙部はるひ（帝京平成大学）

清水 稔（東京学芸大学大学院生）

須田 珠生（京都大学大学院生）

コメンテーター：小川 容子（岡山大学）

企画・進行：有本 真紀（立教大学）

1. 企画の趣旨と概要

学会誌への掲載に至る過程を知って、投稿への意欲を感じ、どのように投稿準備をすればよいかイメージしていただくことを目指して企画した。ラウンドテーブルとしたのは、参加者全員が学術的な文章を書く同じ立場の者として交流したいと考えたからである。まず、最近の『音楽教育学』に掲載された3人の論文執筆者の方に、研究の発端から投稿の準備、査読・再査読・修正など編集委員会とのやりとりや、その感想も含めて語っていただいた。コメンテーターからは、査読の流れや「困った論文」、データ解析の基礎について楽しくわかりやすい説明があった。参加者全員から質問や発言があり、時折笑い声に包まれる和やかな雰囲気のラウンドテーブルとなった。

2. 投稿者の体験談

清水会員（「学校教育で音楽をつくることの再認識—音楽は自己のイメージから生成しない—」46-2号, pp. 25-36）からは、論文執筆のために日常的に行っていることや、学会等での発表と投稿の関係、研究成果が論文になるには「他者との関係力」が必要なことなどが語られた。清水会員の場合、当初、投稿資格の関係で『音楽教育実践ジャーナル』に投稿したところ不採択となり、『音楽教育学』への投稿に切り替え、「修正再査読」を経て「条件付き採択」となったこと、その後も編集委員会とのやりとりを繰り返しながら掲載に至った過程が報告された。条件付き採択となった際には10ページを超す

査読通知文が届き、修正に向けての具体的で詳細な修正意見と査読者のコメントが記されていたこと、その後校了するまでに編集委員とのメールのやり取りが百通を超えていたことに、会場からは驚きの声が上がった。掲載を経て、①文章の校正に関することや表記の統一などは最初からしっかりと意識する、②「どう伝えるか」を考え読者に分かりやすい論理と文章にする、③「知のリレー」にかかわることの喜びと誇りをもって努めたい、という振り返りと今後の意欲が示された。

乙部会員（「5歳児の協同的な合奏づくりの検討—幼保小接続の視点から—」46-1号, pp. 1-12）の場合は、当初ボランティアとして保育園に入り、信頼関係を築いた後に実践を観察し、その観察記録の蓄積から論文が生まれたことが語られた。はじめから投稿を目指してはいなかったものの、貴重な事例を残し伝えたいという思いが生まれたという。再査読では、特徴的な事例を示すだけでなく園児の変容プロセスを大事にして修正するよう求められたため、各グループの全事例を時系列に並べて全体を書き直し、条件付き採択となった後も根源的な問いをもって何度もビデオを見返したり、リアルに伝わる客観的な記述となるよう心がけたとの報告がなされた。

須田会員（「学校校歌作成意図の解明—東京音楽学校への校歌作成依頼状に着目して—」46-2号, pp. 1-12）の投稿の動機は、修士論文に用いた史料の一部をもとに新たな論文をまとめたと思ったこ

とと、博士論文に向けて査読付き論文が2本以上必要なことであった。校歌に関する内容であったこと、年4回の投稿締切があつて計画が立てやすかつたことから『音楽教育学』を選んだという。再査読となった際のコメントには、手持ちの史料からは言えないことや史料には書かれていない内容など、史料上の制約から応えるのが難しいものもあり、リプライ文書に史料の複写を添付してその旨を記述したことが報告された。また、投稿時の原稿はA4判で提出するが、印刷時にB5判となるために図表を拡大する必要があり、文章を削るのに苦労したことから、投稿時にそこまで注意しておけばよかったとの反省があつた。

3. コメンテーターから

小川会員からは、投稿論文を作成する際に、①査読者の目線（新規性：あなたの主張と既存の研究との差異、有用性：何にとつて誰にとつて役に立つか、信頼性：主張を裏付けるデータ、了解性：読者にとつて論旨展開はわかりやすいか）をもつことと、②自分の研究を第三者目線で確認すること（リサーチクエスションと、そこから仮説への流れ、データの妥当性・客観性・信頼性の確認）の重要性が示された。また、量的変数であれ質的変数であれ、リサーチクエスションに立ち返り、それを明らかにするための方法を吟味し、その方法で何を明らかにするのかを焦点化するとともに、大きな枠組みを忘れないで研究を進めるべきとのアドバイスがあつた。さらに、分散分析について具体例を示しながら、結果の書き方と見方の解説がなされた。

4 参加者とのやりとりから

Q：修正意見に対するプレッシャーを感じた？

→修正意見が届いてから何度も読み返し、どう修正しようかと常に気にしていた。

→反論しようと思った部分もなくはない。

→基本的に修正意見を取り入れて修正すべきだが、応えられない部分があればリプライ文書に丁寧に理由を説明する。特に、修正を条件に掲載可となつてからは、編集委員会は著者とやりとりしながら、どうすればより良い形でゴールできるかを一緒に考える伴走者だと思っている。

Q：『ジャーナル』と『音楽教育学』の一番の違いは？

→先行研究の扱い方だと思う。

Q：共同研究、複数著者での投稿はどのくらい？

→査読者も委員も、すべての原稿をブラインドで読んでいたため、カウントしていない。印象としては、個人での投稿のほうがやや多いかもしれない。

Q：論文を書き始めてから投稿するまでにどのくらいの時間をかけている？

→常に考えているので、いつ書き始めたかを特定することができず、どのくらいとははっきり言えない。

→投稿までよりも、修正のほうに時間がかかった。

Q：自分が教えている場面を、どのように記録すればいい？

→自分では教えずに観察できたので、広角レンズを装着したビデオカメラ1台で撮影しながら、フィールドノートを書いた。

→前方向からと後ろ方向から2台のビデオカメラを使い、できるだけ時間を置かないで記録に起こす。

このほかにも、さまざまな質問や意見、応答があつたが、中でも次のような発言が印象に残つた。

- ・論文とは集合表象である。孤立した個人が書くのではなく、これまで積み重ねられてきた知の歴史の上に、知を重ねていく共同制作である。
- ・完璧な論文は存在しない。人にどのように読まれるのかを知るためにも、積極的に投稿したい。
- ・論文は、知のアリーナの中で知を共有するためのルールに則つたものである。一定の形式やルールを守つた中でこそ、独創性が生かされる。

ゼミナールの風景

8月28日

プレ企画《あまんじゃくとうりこひめ》



8月29日

ワークショップ アフリカンリズム 振り返りの様子



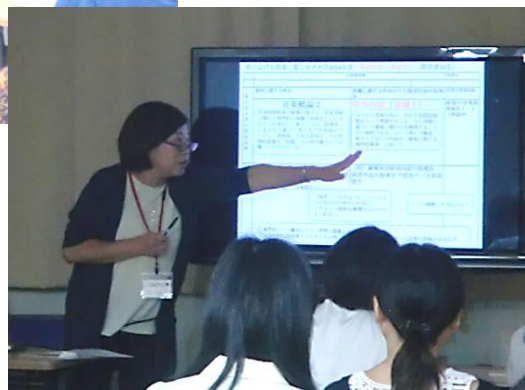
「野沢温泉村の一貫教育」 ご講演の様子



セミナー・ワークショップ 五線譜にかわる選択肢ーフィギュアノートを知る



ラウンドテーブル 養成校における領域「表現」の授業を考える



アイルランド音楽とダンスの夕べ



懇親会



8月30日

ワークショップ 掛け合い歌であそぼう



ワークショップ 音声分析勉強会



ラウンドテーブル 学会誌に投稿しよう！その前に・・・



あとがきにかえて

8月28（プレ企画）、29、30日の3日間、長野県の野沢温泉村において、第8回夏季ワークショップが開催されました。雨続きだったそれまでの天気とはうって変わって好天に恵まれ、村内各所の外湯につかったり、通りのお店でジェラートを味わったり、高野辰之記念おぼろ月夜の館斑山文庫の展示を眺めたり、と、プログラムの空き時間をそれぞれにゆったりと楽しみつつ、延べ111名が初秋の北信濃でのワークショップに参加しました。初日はミサイル発射のアラートに緊張が走ったこともあり、役場はいつもと違う忙しさに包まれたそうですが、村長の富井俊雄様には参加者へのお言葉をいただき、教育長の岩上芳宗様からは地域の状況と教育についてのお話を伺う貴重な機会をつくっていただきました。野沢温泉村、学校園の子ども達、先生方、保護者の方々、参加者を快く迎え入れて下さった地域の方々、ご後援をいただいた野沢温泉村教育委員会、長野県音楽教育学会、長野認定こども園協会の皆様に心より御礼申し上げます。

日本音楽教育学会は、これまで、今回も含めて8回のワークショップと14回のゼミナールを行いました。たとえば、第6回京都やましろゼミナールでは、「音楽文化をつむぐ」というテーマで住民の方々にも広くご参加いただき、第8回妙高ゼミナールでは、地元「赤倉子ども太鼓」の演奏で開会するなど、夏の学会行事では、地域との連携を大切な課題として位置付けてきました。今回の第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉では、野沢温泉村教育委員会の全面的なご協力のもと、のざわこども園、野沢温泉小学校、野沢温泉中学校において、子どもたちを対象とするワークショップを日常の教育活動の一環として受け入れていただき、参加者もその場で振り返りの場をもつことができました。

折しも、今年3月に公示された学習指導要領・教育要領の改訂の基本方針として、「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視する」ことが掲げられたばかりであり、地域連携型の今回の新たな試みは、これからの学びに向かうために、ともに考える貴重な場となりました。ワークショップ初日のお昼に、岩上先生からお話いただいた内容とも大きくつながりますが、今回の企画が実現したのは、保小中一貫教育・高校連携教育という野沢温泉学園における力強い取り組み、そして、野沢温泉村全体の地域力のおかげであったことは言うまでもありません。こども園の子どもたちは、地域のお祭りを模して道祖神ごっこで遊び、小学校の子どもたちは、道祖神祭りで活躍する父のことを誇らしげに歌う……、地域文化の中、地域の方々の結びつきの中で育つ子どもたちから、参加者は多くの気づきをもらいました。単なる観光客としてではなく、地域の中に入れていただいたおかげで得られたものは、とても大きかったと思います。

プレ企画となったオペラ《あまんじゃくとうりこひめ》は、実は、高野斑山（辰之）他編『家庭お伽噺』第7篇（明治40）に収録された「うりひめ」との関連で、昨年度、当地で行われたセミナーにおいて演奏したことがきっかけとなり、こども園の木藤純一園長先生のお力添えをいただいて実現しました。出演者は、オペラシアターこんにゃく座の大石哲史氏

に指導していただき、都内で集まって練習を重ね、事前にこども園の先生方との打合せを行い、当日午前中のプレワークを経て、保護者や参加者の見守る中で子どもたち参加の公演を迎えました。「童話は地方地方で其の地方的の特色を帯びて居るのです。又一个の話でも筋は皆多少違って居るのであります」（明治 39）という高野の弁の意味するところが、こども園でも、小学校での「掛け合い歌であそぼう」でも、そして、中学校での「アフリカン・リズム」でも通底していたように思い、野沢温泉村の高台に眠る高野にも現在の取組みを伝えることができたように感じました。

午後の時間の会員持ち寄りの多彩な学習会については、公民館の整った施設を使わせていただくことができ、参加者それぞれがじっくりと取り組んで、充実した学びが実現しました。また、懇親会では、館長の上原一雄様、職員の方々にご協力いただいております月夜の館の前庭を使わせていただき、アイルランド音楽をみんなで味わい、踊り、和やかな懇親の場をもつことができました。教育次長の河野精一様には、計画段階から学校園との連携、会場設営、昼食会場でのご配慮にいたるまで、すべての面で支えていただき、本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

最後になりますが、持ち寄りでの企画を発案・実現してくださった会員の方々、全体の計画を立て、こども園、教育委員会とのパイプ役となってくださった今川恭子副会長、事務局長として円滑な運営に尽力してくださった木村充子理事、お一人お一人が各持ち場ですばらしい力を発揮し、連携して動いてくださった実行委員、参加者各位、皆様のおかげでワークショップを無事終えることができました。本当にありがとうございました。

2017 年 12 月 25 日

第 8 回夏季ワークショップ in 野沢温泉
実行委員長 権藤 敦子



日本音楽教育学会第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉

実行委員（◎ 実行委員長・○ 事務局長）

有本 真紀	(立教大学)
石川 眞佐江	(静岡大学)
市川 恵	(早稲田大学)
伊原 小百合	(東京藝術大学院生)
今川 恭子	(聖心女子大学)
加藤 富美子	(東京音楽大学)
○木村 充子	(桜美林大学)
桐原 礼	(信州大学)
小井塚ななえ	(東洋英和女学院大学)
小佐川心子	(立教女学院短期大学)
◎権藤 敦子	(広島大学)
鹿倉 由衣	(東京藝術大学)
長井 覚子	(白梅学園短期大学)
早川 倫子	(岡山大学)
村上 康子	(共立女子大学)

第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉 報告書

発行日 平成 29 年 12 月 25 日

編者 日本音楽教育学会 第8回夏季ワークショップ in 野沢温泉 実行委員会

発行 日本音楽教育学会

事務局 〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX : 042-381-3562 E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

学会 URL <http://日本音楽教育学会.com/>